

彫刻のモチベーション

—彫刻からアートへ—

幼児教育学科講師・浅野秀男

要 約

西洋彫刻史を概観する中で、彫刻作品、作者、理念の関係を図に示し、古代から現代までの彫刻制作のモチベーションの変遷を捉えながら、彫刻の意味を考える。また作家としての著者の彫刻制作のスタンスを再考する。

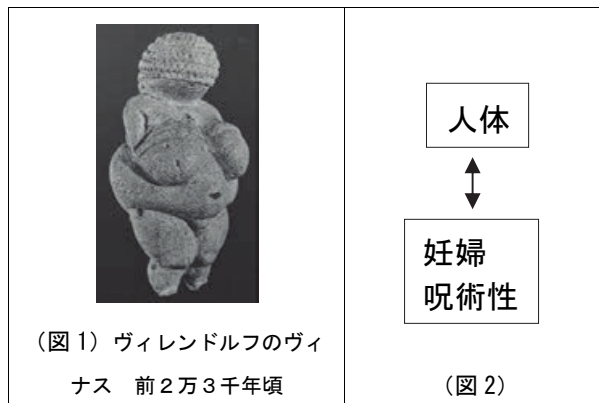
キーワード：西洋彫刻、作者、理念、モチベーション、現代彫刻、彫刻家、アート

(2017. 11. 15 受稿 査読審査を経て 2018. 1. 19 受理)

1. はじめに

現代美術の中で、「彫刻」という概念が、よく言えば拡大したとも言えるけれど、一方では、曖昧になったとも言える。多様な美術が生まれ、新しい技法や方法で表現され、アートと呼ばれている。そうした状況の中で、本稿は、西洋彫刻史を概観し、それぞれの時代の彫刻制作のモチベーションを、作品、作者、理念を図として整理し、現代の彫刻に至る流れを考えてみたいと思っている。

性をも持っている。図示すれば、(図2) のようになる。この段階では、モチーフと社会性は一体であり、作者は出てこない。



2. 近代までの彫刻のモチベーション

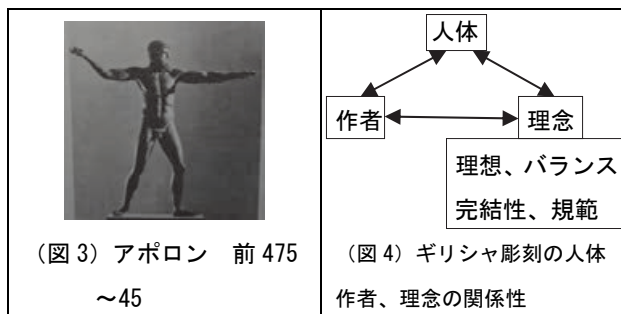
西洋的には先史時代、日本的には縄文・弥生の土偶・埴輪も含めて、20世紀前半までの彫刻は、人型の彫刻(人体)と言っていいだろう。ギリシャ彫刻も、ゴシック彫刻も、天平彫刻も、それぞれの理念は違ってもモチーフとしては人体である。「彫刻をつくる」とは人体(人間)を作る事であった。人間は個と社会という構造の中で生きている。彫刻は「個」としての人間への関心、憧れ、希望(ピュグマリオンの情熱)¹⁾と社会の中でどう生きるかという関心(呪術的、宗教的、現実的)が、基本的なモチベーションであろう。そうした観点から西洋彫刻史を概観してみよう。

2) ギリシャ彫刻

ギリシャ芸術を、グンドルフは著書「若きゲーテ」で、ゲーテの詩を、次のように引用し述べている。「すなわち神々と人間とは離れたものではない。流れゆく推移のなかの一階梯が神と人間とをひとつのものにするのである。」³⁾ギリシャ彫刻は、神と人間が一体という理念から、人間の理想の人体をつくっている。(図3)バランス、完結性、知的な創造力など、西洋彫刻の規範、典型として、「伝統」をつくりだしたと言ってもいいだろう。(図4)において、人体及び作者、理念の関係を示しておく。

1) 先史時代


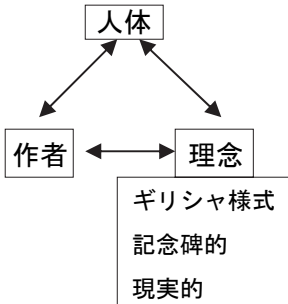
先史時代は考古学では、前4万年から前8千年頃と言われている。²⁾また地域的にもかなり広いのだが、本稿の彫刻のモチベーションという主旨から、一括して彫刻の起源として扱っておこう。(図1)のヴィレンドルフのヴィナスは妊婦像であろう。ここでは妊婦という一般名詞であり、個人をさしてはいない。またこの妊婦像は呪術的な意味を持っていると考えられるところから、社会



先史時代は、人体及び作者、理念が明確には判っていない。ただ前項で述べたように、彫刻をつくるモチベーションとしての、人間及び社会への関心があったと考えていい。ギリシャ彫刻は、明確に、人体、作者、理念の関係性が見えてくる。つまり、彫刻をつくるモチベーションの内容が見えてくる。



3) ローマ彫刻

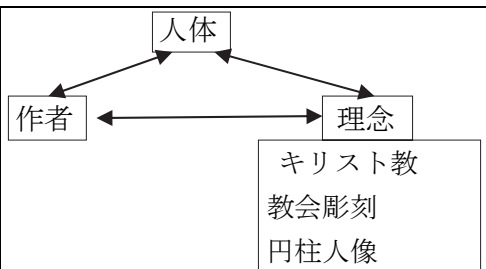
ローマ彫刻は、ギリシャ彫刻の様式を踏襲しながら、肖像彫刻から始まり、ローマ帝国の拡大と共に、個人を顕彰する彫像や、浮彫、公共彫刻へと展開する。(図5)ギリシャ彫刻と比較すればより現実的であり、顕彰するという意味では記念碑的だといえる。ギリシャ彫刻の理想主義に対して、現実主義といえる。(図6)

	
<p>(図5) ユリウス・カエサル の頭部 前50年頃</p>	<p>(図6) ローマ彫刻の人体、作者、理念の関係性</p>

4) ゴシック彫刻

313年、キリスト教が公認され(ミラノ寛容令)ヨーロッパやその周辺地域に、「神の家」が建てられる。ビザンチン、ロマネスクと教会が建てられ、ゴシックの大聖堂に展開する。ゴシック彫刻は、そうした大聖堂の教会彫刻として、教会入口のファサードや扉両側に「円柱人像」としてつくられる。(図7・8)中世の彫刻のモチベーションは、キリスト教(宗教)といえる。(図9)


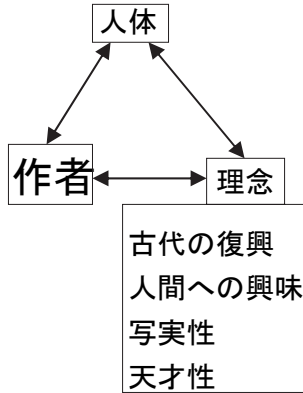
	
<p>(図7) エクレシア、シナ ゴーク 1230年頃</p>	<p>(図8) シャルトル大聖堂 1205年~15年頃</p>


<p>(図9) ゴシック彫刻の人体、作者、理念の関係図</p>

5) ルネッサンス彫刻

ルネッサンス芸術は、古代芸術の復興といわれる。彫刻は、ゴシックの宗教性から脱し、より自然を再現していく。(写実性)科学の発達にみられるように、知的関心が高まり、人間の存在への興味、人間像の復活がおこってくる。また古代の彫刻の復興を目指した中で、古代をこえる天才がうまれてくる。(ミケランジェロ)(図10)彫刻のモチベーションとしては、人間存在への興味、写実性という意味では、近代に向っているといえる。また作者の天才性は作者の個性が明確になり、近代を予感させる。古代の復活という理念から、モチーフは、神、神話がより多く表現されている。そうした意味から、人体、作者、理念の関係性は、前時代と同じだといえる。

(図11)

	
<p>(図10) ミケランジェロ ダビデ、1504年</p>	<p>(図11) ルネッサンス彫刻の 人体、作者、理念の関係性</p>

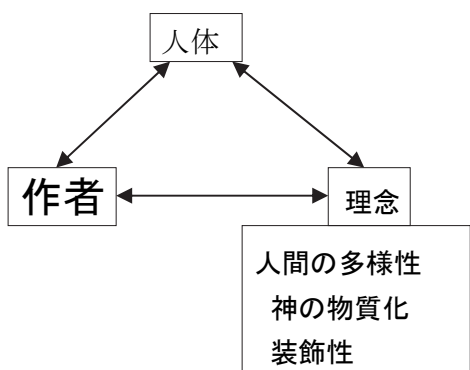
6) バロック彫刻

バロック芸術を表現することは難しい。表現しがたいことがバロック芸術の特徴といってもいい。社会の多様な変化が、多様な芸術をうみだした。『マニエリスムからロココにいたる古典期以後(ポスト・クラシック)の文化のなかで、人間像がいかに変化したかを、彫刻の歴史がもっともよく教えてくれる。直立した人体が次第にねじれ、ゆがみ、跳び上がり、飛ぶのを、そして空や

雲や光と合わさり、人間の自立性を喪失してしまう』
 4) バロック彫刻は、人間存在の多様性、神の物質化とい
 ってもいい。(図 12) もう一つの特徴は装飾性といっ
 ていいだろう



(図 12) ベルニーニ ルドビコ・アルベルトーニ
 1671年~74年



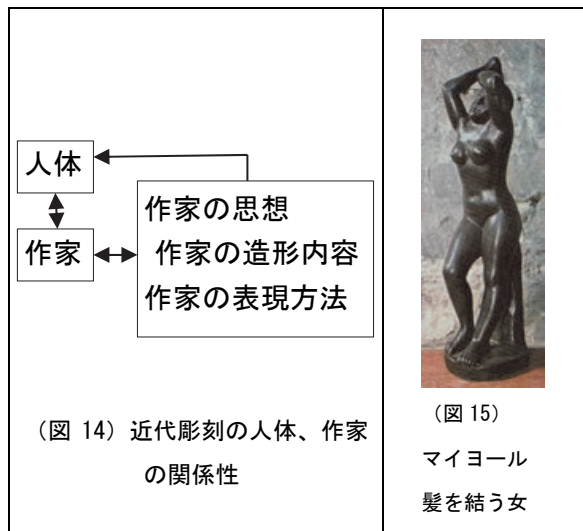
(図 13) バロック彫刻の人体、作者、理念の関係性

バロック彫刻は多様ではあるが、やはり神の表現を持つ
 ている。(図 13)

3. 近代彫刻のモチベーション

各時代に区切って、彫刻のモチベーションを、人体と作
 者と理念の関係で述べてきた。どの時代も構造は同じで
 ある。違いは理念の内容であることは明白であろう。そ
 してその理念の中心は、人間と神の表現ということにな
 る。人間の形は神であり、神の形は人間である。近代に
 なると、哲学では、「私は考える、ゆえに私は存在する」
 5) という個の発見、社会的には市民による革命、貴族や
 教会という支配者の芸術(彫刻)から市民へという変化
 がおこる。そうした中で、完全とはいえないが「神」失
 われていく。今までの構造から「神」という理念が失わ
 れていく。人体と作者(作家)がモチベーションの構造
 になる。彫刻の近代は、フランスでは、オーギュスト・
 ロダン(図 16) イタリアでは、メダルト・ロツン(図
 17)からはじまる。ロダン、ブルーデル、マイヨール(図
 15)、デスピオ、ジャコメッティ。イタリアでは、マリ
 ーニ、マンズー、ファッツィーニ、グレコ等多くの彫刻
 家が、19世紀~20世紀に活躍する。

人体という人間をモチーフにして、作家の思想や造形内
 容、方法を表現することが、モチベーションになってく
 る(図 14)



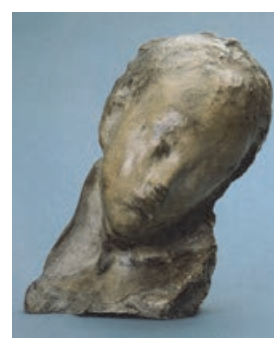
(図 14) 近代彫刻の人体、作家
 の関係性



(図 15)
 マイヨール
 髪を結う女



(図 16) ロダン 永遠の偶像

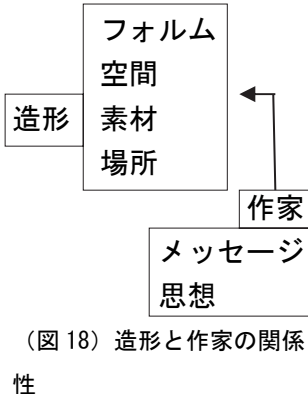
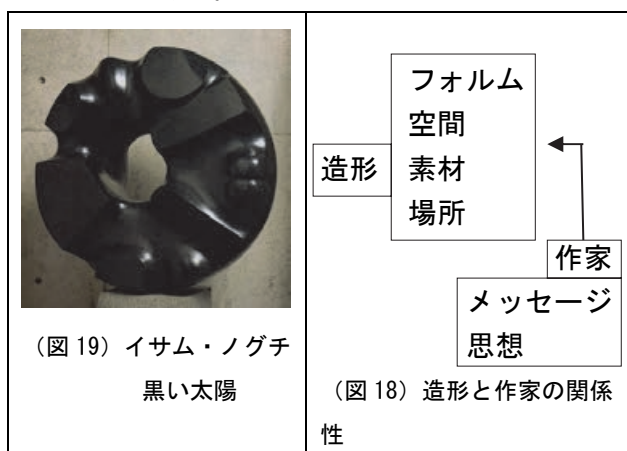


(図 17) ロツン 病める子

作家の思想や造形表現がモチベーションになると、モ
 チーフとしての人体が必要かという疑問が生まれてくる。
 作家の思想や造形が、人体から解放され、造形そのもの
 で存在する彫刻が生まれてくる。フォルム、素材、空間、
 場所等の造形内容が、現実にはない形をうみ、それ自体で
 作家の表現になっているものである。ブランクージ、ヘ
 ンリー・ムーア、イサム・ノグチ等、多くのいわゆる抽
 象彫刻が誕生する。(図 19) ここで人体という形が、消
 失する。モチベーションとしては、彫刻(造形)が存在す
 ることが、作家の存在証明になることだろう。第二次世
 界大戦後は、造形が消失し、作家の思想だけが表現され
 た作品も発表されている。(図 18) はたしてそれを彫刻
 といえるのか? 「彫刻とはなにか」という問いに答えら
 れるのは、ここまでだと思っている。

先史時代から20世紀半ばまでを簡単に述べてきた。
 彫刻は人間(神)及び人間世界を表現してきた。多くは
 人体という形を使って、個と社会の中で生きてゆく人間

を表現し、20世紀にはいって人体という形が消えても、作家という人間が形をつくるということで人間世界を表現してきた。彫刻という概念、言葉とは、そうしたものではないだろうか。



4. 彫刻からアートへ

近代までの彫刻のモチベーションを述べてきたが、それは人間中心主義、人間から見た世界の上に成り立っていた。20世紀にはいって多くの思想や価値観が生まれてくる。マルクス主義や精神分析、実存主義等、新しい世界の見方が生まれ、戦後の芸術や美術を用意してきた。例えば、フロイトの心理学は無意識の世界を発見した。人間が考え選択してきた方法が、無意識の世界の発見によって、全く別の思想、選択がある事が示されたのである。人間の個への信頼が揺らぎ、人間の意識、意思への疑問が生まれたとも言える。そうした思想的な流れの中で、1970年代にはいり構造主義、環境美学、フェミニズム等、また新たな世界観が生まれてくる。いわゆるポストモダンと言うことだろう。人間中心主義の上に成り立ってきた従来の「彫刻」は、新しい価値観の上には載らない。彫刻からアートへと言うことだろう。「アート」はそうした多様な思想や価値観を背景に持っている。また戦後アートは、作家が自由という形容詞を冠した価値観から多様な方向性を持っている。近年では、科学技術やポピリズムが先行するアートが多く生まれてきたように思われる。作品を作り続ける以上、そうした芸術や美術の構造を理解しておく必要があると思っている。なぜならば、アートにも人間が必要とするモチベーションがあるからである。

5. 終わりに

著者は、平成27年に第26回UBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）に出品し、幸い実物制作作品に選ばれた。

(図20) UBE ビエンナーレは、1961年に日本で最初の大規模な野外彫刻展として生まれ、2年に1度のビエンナーレ形式で開催を続け、現在では世界で最も歴史のある野外彫刻の国際コンクールである。第26回展は、世界30カ国から266点の応募があり、18点の実物制作作品が選ばれた。選ばれた18点の作品を見ると、現在の「彫刻とアート」の現状が如実に表れている。詳細を述べることはあまりにも多様であるので別稿にするが、今回多くを述べてきた人体をモチーフにした作品もあり、彫刻とアートの混沌とした状況がよく表れている。歴史ある国際コンクールでありながら、タイトルにも主催者側の葛藤が感じられる。最後に、芸術や美術は時代を反映し変化していくものではあるが、次代に遺されていくものでもある。因みに昨年から今年にかけて、国内で注目された展覧会は、「若冲」であり、「ジャコメッティ」であり、「運慶」だろう。遺されたものを考えながら今後も作品制作を続けていきたいと考えている。



引用文献

- 1) 中山公男 「世界彫刻美術全集 彫刻の誕生」
(小学館 1977) p158~159
- 2) 中山公男 「世界彫刻美術全集 彫刻の誕生」
(小学館 1977) p163
- 3) 穴沢一夫 「世界彫刻美術全集 ギリシャ」
(小学館 1976) p9
- 4) 若桑みどり 「世界彫刻美術全集 バロック」
(小学館 1975) p1
- 5) 熊沢純彦 「西洋哲学史、近代から現代へ」
(岩波新書 2006) p7

図版

- 図 1 中山公男 「世界彫刻美術全集 彫刻の誕生」 (小学館 1977)
- 図 2 自作
- 図 3 穴沢一夫 「世界彫刻美術全集 ギリシャ」 (小学館 1977)
- 図 4 自作
- 図 5 高橋栄一 「世界彫刻美術全集 ローマ」 (小学館 1977)
- 図 6 自作
- 図 7 黒江光彦 「世界彫刻美術全集 ゴシック」 (小学館 1976)
- 図 8 黒江光彦 「世界彫刻美術全集 ゴシック」 (小学館 1976)
- 図 9 自作
- 図 10 高階秀爾 「世界彫刻美術全集 ルネッサンス」 (小学館 1976)
- 図 11 自作
- 図 12 若桑みどり 「世界彫刻美術全集 バロック」 (小学館 1977)
- 図 13 自作
- 図 14 自作
- 図 15 富永惣一・高田博厚監修 近代彫刻の三大巨匠 ロダン・ブルーデル・マイヨール展 (1972)
- 図 16 富永惣一・高田博厚監修 近代彫刻の三大巨匠 ロダン・ブルーデル・マイヨール展 (1972)
- 図 17 岐阜県美術館 20世紀イタリア具象彫刻展 (1988~89)
- 図 18 自作
- 図 19 東京国立近代美術館 朝日新聞 イサム・ノグチ展 (1992)
- 図 20 第26回UBEビエンナーレ 著者自作 (2015)

Motivation to Sculpture

Transition From Sculpture to Art

Hideo Asano

Department of Early Childhood Education